



F.バイエル『バイエル教則本・付録編メロディーブ ックop.101bis』研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校 公開日: 2019-04-09 キーワード: 作成者: 小野, 亮祐 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008562

F.バイエル『バイエル教則本・付録編メロディーブックop.101bis』研究

小野 亮 祐

北海道教育大学釧路校音楽教育研究室

A Study on “Melody Book” op. 101bis by F. Beyer

ONO Ryosuke

Department of Musical Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

バイエルFerdinand Beyerの”Vorschule im Klavierspiel” Op.101 (以下『バイエル』と呼ぶ)は昨今のピアノ・レッスンではあまりその使用が見られなくなったものの、歴史的経緯により教員養成や、保育者養成ではいまだ需要が高い。この教本については、近年その原点史料の調査が進んでおり、ドイツではもとより、広くヨーロッパ、アメリカで多くの部数を、そしてかなりの長期間にわたって出版されたことや、日本への移入の経緯やエディションの違いなど、かなり詳しいことがわかってきた(安田・多田・長尾2009、多田2009、多田2010、安田2012、小野・多田2015、小野・多田・長尾2016)。それらの研究においてもすでに指摘されてきていたのだが、『バイエル』には作品番号が付けられた続編ともいべきものが3冊存在する。日本語版の『バイエル』ではそぎ落とされてしまっているが、ショット社から出版された初版の表紙には「人気メロディーによる100の気晴らし曲の付録付き(Avec un Supplement de 100 Récréations sur Mélodies favorites.)」とはっきりと明記されているのだ。つまり、『バイエル』は、少なくともバイエルや出版社側の意図としては、『バイエル』だけで存在するのではなく、この付録を含めた一つの「セットもの」として当初は出版されたといえよう。この付録の存在が意識から消えていったいきさつや背景も大変興味深いところであるが、本稿ではまずこの付録について、その3冊の概要と、1冊目の付録についてのみその内容の検討をしたい。また初版を出版したマインツ・ショット社は刊行台帳Druckbuchに、ほぼすべての出版物の印刷を記録していることから、本稿では第1冊目の印刷記録から読み取れることも考察する。

1. 『バイエル』付録の概要

先ほども述べたように、バイエルには3つの付録が存在する。まずそれらを列挙し概観しよう。なお、今回使用する楽譜は、全てベルリン国立図書館蔵のものである。

1) Melodienbuch 100 Erholungen für die Jugend in kleinen Lektionen über beliebte Motive für das Piano-Forte

von Ferd. Beyer Op.101bis. Als Anhang zu der Vorschule im Klavierspiel. (プレート番号: 10187)

2) Melodienbuch 2ter Band. Erholungen in kleinen instruktiven und progressiven Lektionen über beliebte Motive(sic) für das Piano-Forte von Ferd. Beyer. Op.148. Neue Folge von Op. 101bis. (プレート番号: 17066 2)

3) Melodienbuch 3ter Band. Erholungen in kleinen instruktiven und progressiven Lektionen über beliebte Motive(sic) für das Piano-Forte von Ferd. Beyer. Op.148bis. Neue Folge von Op. 148. (プレート番号: 17066 3)

3冊には共通してこれらのドイツ語の表紙のフランス語訳の表紙がつけられている。各表紙の邦訳は以下の通りである。

1) メロディーブック。小さなレッスンでの若者のための人気のモチーフによる100の気晴らし曲、作品番号101bis。『ピアノ演奏の予備教則本』(訳注:『バイエル』のこと)の付録として。

2) メロディーブック第2巻。人気のモチーフに基づく教育的で段階的な小さなレッスンでの気晴らし曲。作品番号148. 作品番号101bisの続編。

3) メロディーブック第3巻。人気のモチーフに基づく教育的で段階的な小さなレッスンでの気晴らし曲。作品番号148bis. 作品番号101bisの続編。

1についてははっきりと『バイエル』の付録であることが明記されている。2については作品番号こそ変わっているが、『メロディーブック第2巻』と記されていること、また101bisの続編であることが明記されていることから、明らかに1の続編であることがわかる。3についても2とタイトルの文言がほぼ同じことから、同様の事が言えよう。これらには前書きなどが付けられておらず、どのような使い方が意図されていたのかは明確でないのだが、タイトルのニュアンスからは、いわゆる技術習得目的の、どちらかというと無味乾燥な練習曲の対して、レッスンの合間に気晴らしになるような流行・人気のメロディを使った楽曲であ

ることがイメージされる。現代でも雑誌などの形で人気のポピュラー音楽の編曲などが出版されているが、そのようなものに近いものといえよう。

一方で『バイエル』には、やはりほとんどの日本語版ではそぎ落とされてしまっているのだが、バイエル自身による前書きが記されている。その最後には「中くらいの難易度の詳しいピアノ教則本Klavierschuleを後に続いて出版するつもりである」と記されている。中くらいの難しさがどの程度を指すのかはあいまいだが、ひょっとすると、これらの付録がそれに該当するものなのかもしれない。

刊行台帳によるとこれらの初版出版年月日は、1のOp.101bisが1850年11月19日、2のOp.148が1864年6月18日、3のOp.148bisは1865年1月2日である。同じく刊行台帳から『バイエル』の初版が1850年8月30日に出版されていることが確認されているので（小野、多田、長尾2016）、『バイエル』とOp.101bisはかなり接近して出版されていることがわかる。それとは反対に、あとの2冊は『バイエル』から14年くらいたっての出版となっている。出版時の詳細なやり取りを示す文書は確認されていないものの、『バイエル』、『メロディーブック』双方のタイトルおよび初版出版年月日の近さから言って『バイエル』の出版と一緒に、まさにセットで計画をされていたことは間違いないだろう。対してあとの2冊は、『バイエル』から14年もたっていることを考えることから、『バイエル』初版の時点では念頭になかった、もしくはそれほど明確には計画されていなかったものと思われる。そうすると、『バイエル』の前書きにあった「中くらいの難易度の詳しい教本」がこれらの付録を意味するのであれば、少なくとも第1冊目ではなく、第2、3巻がそれに該当するといえる。

それでは、本稿で詳しく取り上げる『メロディーブック』Op.101bisについて次にその内容を見ていくことにしよう。

2. 『メロディーブック』Op.101bis所収の楽曲について

本曲に含まれている全曲のタイトルなどについては、論文末の一覧表に取りまとめたのでそちらをご覧ください。一覧表をもとに、ここでは内容についての考察を行っていくこととする。まず論文末の一覧表を見てわかることは、現在の日本でも良く知られている作曲家やそのオペラが立ち並んでいることである。そして、それと同様に目立って見えるのは民謡の存在である。表1は『メロディーブック』に含まれる民謡とオペラを集計したものである。また、『メロディーブック』は4分冊に分けた分冊版でも出版されているので、分冊ごとの集計も行っている。

表1

民謡・オペラ別集計	
ドイツ民謡・Air Allemand	21
イギリス民謡・Air Anglais	2
オーストリア民謡・Air Autrichien	2
ボヘミア民謡・Air Bohemien	1
スコットランド民謡・Air Ecosais	2
スペイン民謡・Air Espagnol	2
フランドル民謡・Air Flamand	1
フランス民謡・Air Francais	2
アイルランド民謡・Air Irlandais	2
イタリア民謡・Air Italien	3
ポーランド民謡・Air Polonais	3
ロシア民謡・Air Russe	3
スイス民謡・Air Suisse	4
チロル民謡・Air Tyrolien	3
ヴェネツィア民謡・Air Venetien	1
総計	52
第1分冊（民謡数）	24
第2分冊（民謡数）	13
第3分冊（民謡数）	13
第4分冊（民謡数）	2
全民謡数	52
第1分冊（オペラ数）	8
第2分冊（オペラ数）	12
第3分冊（オペラ数）	15
第4分冊（オペラ数）	13
総オペラ数	48

まず、楽曲のジャンルの点から見ると、オペラが48曲、民謡が52曲となっている。若干民謡が多いものの、ほぼ同数となっている。つまり100曲すべてがこのどちらかである。いわゆる器楽、例えば交響曲、協奏曲やドイツ・リートといったものの編曲は含まれていない。民謡の地域的な内訳も表1によると、ドイツ民謡が半分くらいを占めている以外に15もの地域・民族のものがおさめられている。ヨーロッパには限定されているものの地域的多様性に富んでいるのも特色である。バイエルにはさらにこのような地域的多様性を持った外国の民謡の編曲シリーズともいえる曲集を同じショット社から出版している。その代表は『祖国の歌Chants patriotique(Vaterlandlieder)』（Op番号なし）と題されたシリーズである。出版社のカタログ（B. Schott 1900）を参照すると、このシリーズは全70曲を数えるのだが、その中にはスペイン国歌、ポルトガル国歌など国歌を

編曲したものや、『メロディーブック』のように様々な地域で親しまれる民謡がおさめられている。中でも注目されるのは、中国の歌、ブラジルの歌、さらには日本の『舟歌 Schiffied』に基づくものも含まれており、当時のヨーロッパでは世界中の音楽が知られていたことも分かるし、なにより職務上の成り行きであるかもしれないがバイエル自身も知っていたのだ。またこのような楽譜が出版されているということは、ドイツのもののみならず他地域の楽曲をピアノで演奏して楽しむという文化がドイツにあったことをうかがわせる。逆に言えば、『メロディーブック』はそのような文化を背景として編纂されたものだと考えられよう。

再び表1に戻ろう。全4分冊の内訳をみてみると、第1分冊だけが民謡が多く占めていることがわかる。そして第4分冊では民謡の占め割合はかなり少ない。加えて論文末の表を参照すると、1ページ当たりの曲数は明らかに第4分冊の方が少なく、第1分冊の方が多。つまり、1曲の長さが第4分冊はかなり長くなっているのだ。第2, 3分冊と追うごとにその傾向が強まっている。また、第1曲(譜例1)を見ると、『バイエル』の前半第1部の手のポジション移動の少ないいわゆる「静かな手」でほぼ演奏できるようになっている。このことは、おそらく第1分冊よりは第4分冊の方が難易度を上げて編集しているものと思われる。つまり導入は短くて比較的容易な民謡で始まり、最後にはオペラのメロディをたっぷりと弾いて味わうというような、そういう趣向で構想されていると考えられる。



譜例 1

作曲家については、明示されているものとされていないものがある。オペラについては初版の時点からすべて示されているが、作者がはっきりしている物でも民謡については記載されていないことが多い。出版年は不明であるが、後にブラウンシュヴァイクの出版社Litolfから出版された同じバイエルの『メロディーブック』(以下リトルフ版と呼ぶ)が出版されている。非常に興味深いのは、リトルフ版には、初版に書かれていない民謡の歌いだしの歌詞(タイトルの代わり)と、作曲者、またドイツ語以外のタイトルについてはそのドイツ語訳が追記されている。さらに興味深いのは、リトルフ版は完全な初版のコピーではなく、レーリンクFranz Rellingなる人物による改訂版(Neue revidierte Ausgabe)であることが表紙に明記されており、初版の楽曲がいくらか入れ替えられている。厳密に言えば、このリトルフ版に至るまでの間に、ショット社の方で初版に手を入れたことも考えられなくもないが、ショッ

ト社の刊行台帳にも変更は記載されておらず、おそらくレーリンクによる変更と考える方が妥当であろう。

作曲家ごとに収録曲数、オペラ名を集計し、それにリトルフ版で加えられたり、変更されたりした事項を注記に記して一覧表にしたものが表2である。

作曲家を見てみると、オペラの作曲家について言えばほとんどが今でも有名な人物である。その出どころのオペラについても比較的良く知られたオペラからとられていることがわかる。もっとも多いのがドニゼッティ、その次にオペール、ベリーニ、モーツァルト、ロッシーニである。論文末の一覧には原曲となったオペラの初演の年も記しているが、18世紀後半のモーツァルトを例外として、

表2 (カッコ内の数字は曲数)

作曲家名	曲数	オペラ	備考
Adam	2	Le Postillon de Lonjumeau Le Brasseur de Preston,	
Auber	8	La Neige, Fra Diavolo, Le Concert de la Cour, Le Cheval de Bronze(2), La Part du Diable, Le Domino Noir, La muette de Portici	Litolff版で7曲が差し替え
Bellini	5	La Sonnambula(2), Norma, I Puritani(2),	
C. Kreuzer	1	Das Nachtlager in Granada	
Caraffa	1		民謡(イタリア)にカウント
Coppola	1	La Pazza per Amore	
Donizetti	12	Lucie di Lammermoor(3), L'Elisire D'Amore, Gemma di Vergi, Belisario(2), Lucrezia Borgia, La Fille du regiment(3), La Favorite	
Flotow	1	Alessandro Stradella	Litolff版でBelliniの楽曲に差し替え
Gomis	1		民謡(スペイン)にカウント
Henri Carey	1		民謡(イギリス)にカウント
Herold	1	Zampa	
Keller	1		民謡(ドイツ)にカウント
Meyerbeer	1	Les Hugnots	Litolff版でAdamの楽曲に差し替え
Mozart	4	Zauberflöte(2), Don Juan	Komm, lieber Mai.を民謡(ドイツ)にカウント
Naegeli	1		民謡(ドイツ)にカウント
Pacini	1	Saffo	
Paigiello	1		民謡(イタリア)にカウント
Pohlentz	1		民謡(ドイツ)にカウント
Rossini	5	Othello, Robert Bruce(Donna del lago)(2), Guillaume Tell, La Gazza Ladra	Litolff版で3曲が差し替え
Schulz	1		民謡(ドイツ)にカウント
Silcher	1		民謡(ドイツ)にカウント・ローレライ
Verdi	4	Nabucodonosor, I Lombardi(Jerusalem), Ernani, Macbeth	Litolff版では別の曲にすべて差し替え
Weigle	1	La Famille Suisse,	
Weber	1	Der Freischütz	
Winter	1	Das Unterbrochene Opferfest	

そのほとんどが1820～40年代のものである。出版された1850年当時は、この年代のオペラの旋律が愛好されていたことがわかる。ここで注目されるのが、リトルフ版で削除された楽曲の傾向である。表2の備考にもまとめて記しているが、オベールがほぼカット、1曲しかなかったフロトウもカットされベリーニの曲に変更、ヴェルディに至っては全曲カットで変更されている。おそらく嗜好の変化が反映されているものと思うが、このリトルフ版の出版年が明らかになれば、この曲目の変化が時代が進むごとの嗜好の変化としても読み取れよう。

また、民謡の中には我々にも唱歌として知られるなじみ深いものが含まれている。それは17曲目のドイツ民謡と59曲目のアイランド民謡である。



譜例 2 (17曲目)



譜例 3 (59曲目)

譜例 2, 3 を見ると明らかだが、日本語題名で言えば17曲目は『ローレライ』、59曲目は『庭の千草』である。『ローレライ』は、現在良く知られる近藤朔風による訳詩のものが明治42年(1909年)の『女声唱歌』に掲載されている。『庭の千草』については、日本の学校唱歌のほぼ最初期のものである明治17年の音楽取調掛編纂『小学唱歌集第三篇』に、「菊」と言う名前で掲載されている。特に後者の『小学唱歌集』は日本の洋楽式音楽教育の黎明期において、外国曲を多く取り入れて編纂された学校唱歌集である(櫻井、ゴチェフスキ、安田2015)。ベートーヴェンも『ピアノとリコーダーのための民謡に基づく変奏曲集』作品105(1819年)の1曲として編曲をしている。The Last Rose of Summer(トーマス・ムーア作詞)で良く知られる旋律は、この歌詞が発表された1805年以前から知られていたという。つまりおそらくは以前から西洋では良く親しまれていて、それがバイエルの『メロディーブック』にも含まれ、また欧米を範として開始した初期の日本の唱歌教育にもいち早く取り入れられたものと思われる。単にバイエルが知っている曲が日本でも知られていたということではなく、これらの音楽が同じグローバルな動きで伝播していくその中に、『庭の千草』があり、この『メロディーブック』があるというほうが妥当だろう。

2. 『メロディーブック』作品101bisの売れ行きについて

小野・多田・長尾(2016)の研究で明らかになっていることであるが、いわゆる『バイエル』は、長きにわたって非常によく売れた。また、安田(2012)によればバイエルはいわば売れっ子のアレンジャーだった。では、この『メロディーブック』はどうだったのだろうか? 初版を出版したショット社の刊行台帳から、その刊行の詳細を見てみよう。表3-1, 3-2, 3-3はその刊行台帳を、レイアウトをほぼそのままに邦訳し、一部手直しを加えたものである。比較的に長きにわたって刊行され続けたために、刊行台帳の標準的なフォーマット1枚では足りず、2枚にわたっている。前述の通り『メロディーブック』は、1冊完全版ものと、4分冊ものの2種類で出版された。1枚目(表3-1)では、1冊完全版と4分冊が混合で記されているが、2枚目になると分けて記載されている。部数に注目すると、ほとんどの印刷ごとに数百単位の部数が続いている。このような部数を一度に印刷することとそれが立て続けになっていることはほかの楽譜・作品にはそう多くは見られないことであり(小野・多田・長尾2016)、この『メロディーブック』が非常に多く、そして2枚にわたっていることから長く売れたということがよくわかる。

また、1枚目、2枚目を合算し分冊、1冊完全版ごとに集計した総計表が表4である。表4を見ると、最もよく売れたのは明らかに分冊のほうで、中でも第1分冊が最も売れたことがよくわかる。その次が1枚目の時点では第4分冊であり、2枚目の時点では第2分冊となっている。1冊完全版は1枚目と2枚目のものを合算しても3400冊ほどで各分冊の総部数に及ばない。このように1冊完全版、分冊における部数の偏りが数字上でははっきりと見えてくるのだが、それはなぜだろうか。まず考えられるのは、おそらく分冊の場合、まずは一番簡単で試しに手に取りやすい第1分冊から購入し、その後良ければ順々に買おうとして、結局第2分冊以降は続かなかった消費行動の場合である。しかし、そういう意味では手が出にくいはずの第4冊が実は比較的多く出ている。これは、おそらくある程度の技術を習得した人物が、しっかりとオペラ編曲を弾いて楽しみたいということで手に取ったことを推測させる。いずれにしても、1冊完全版を手にするほどまでは購買意欲を抱くことがなかった、という買い手も少なくなっただろう。刊行台帳は元来極めて事務的な意味しか持たなかったのかもしれないが、このようないわゆる「消費者心理」まで推測させる大変興味深い史料である。

表3-1

1枚目									
年	月	日	部数	巻数など	年	月	日	部数	巻数など
1850	11	19	400	完全版	1856	9	10	100	4
1851	3	4	200	完全版	1856	12	12	400	4
1851	9	10	100	完全版	1856	12	17	50	完全版
1852	6	5	100	1	1857	10	9	50	完全版
1852	6	5	100	2	1857	2	4	400	1
1852	6	18	100	3	1857	3	18	400	3
1852	9	29	100	1	1857	7	27	400	2
1852	11	4	100	2	1858	1	11	400	1
1852	11	4	100	3	1858	12	21	400	1
1852	11	11	100	1	1858	1	7	50	完全版
1853	1	12	100	4	1858	7	15	50	完全版
1853	2	7	400	1	1858	9	14	50	完全版
1853	2	7	400	2	1859	9	15	50	完全版
1853	2	21	400	3	1859	8	19	50	完全版
1853	2	21	400	4	1859	1	19	400	2
1853	2	21	200	完全版	1859	3	4	400	4
1854	9	7	100	1	1859	9	22	400	1
1854	12	14	50	1	1859	10	13	400	2
1854	12	29	300	1	1860	5	21	400	2
1855	1	11	300	2	1860	6	25	400	1
1855	1	11	300	3	1860	11	21	400	4
1855	1	11	300	4	1861	1	28	400	1
1855	5	25	50	完全版	1861	4	10	400	2, 3
1855	10	31	50	完全版	1862	4	9	400	1
1855	12	31	100	完全版	1862	8	8	400	2
1855	12	27	50	1	1862	10	7	400	4
1856	1	22	400	1	1862	12	9	400	1
1856	5	27	400	2	1863	5	18	400	3
1856	9	2	300	3					

表3-2

2枚目 (4分冊各巻)									
年	月	日	部数	巻数	年	月	日	部数	巻数
1863	12	19	500	1	1876	2	20	400	2
1864	6	6	400	2	1876	12	10	400	1
1865	1	14	500	1	1877	2	28	400	4
1865	2	8	400	4	1877	11	1	400	3
1865	7	21	100	2	1877	12	1	300	1
1865	11	25	400	2	1878	1	9	400	2
1866	1	10	500	3	1878	11	10	400	1
1866	2	21	500	1	1879	11	3	300	1
1866	12	28	400	1	1880	3	12	400	2
1871	6	6	400	1	1880	4	6	400	4
1871	6	6	400	4	1880	8	29	400	1
1872	4	4	400	2	1880	11	26	400	3
1872	7	12	400	3	1882	2	14	400	1
1872	10	16	400	1	1882	11	17	50	2
1872	12	12	400	2	1883	1	27	400	2
1873	1	20	400	4	1883	12	6	400	1
1873	6	30	400	1	1884	4	28	400	4
1873	8	12	400	3	1885	4	29	300	3
1874	1	30	400	1	1885	12	9	400	1
1874	2	12	400	2	1887	5	11	400	2
1874	7	8	400	4	1888	7	2	400	1
1874	11	26	500	1	1893	6	10	400	3
1874	11	24	400	4	1894	11	30	150	4
1875	3	16	100	3	1904	1	9	100	2
1875	6	10	400	3	1904	3	18	100	1
1875	11	10	500	1	1909	7	30	100	1

表3-3

2枚目 (完全版)							
年	月	日	部数	年	月	日	部数
1860	1	10	50	1867	10	11	100
1860	8	22	50	1875	4	16	50
1860	11	10	100	1876	8	25	100
1861	7	20	100	1879	12	9	100
1862	8	28	100	1881	10	26	100
1864	1	26	75	1881	10	20	100
1864	8	7	100	1885	2	24	100
1864	11	26	100	1887	10	8	300
1865	8	19	100	1906	11	26	50
1867	1	10	100	1908	7	18	100

表4

	巻数等	部数
1枚目 各巻小計	完全版	1450
	1	4,800
	2	3,700
	3	2,400
2枚目 各巻小計	4	4,500
	1	8,100
	2	4,250
	3	3,300
2枚目・完全版小計	4	3,350
	完全版	1,975
総計	完全版	3,425
	1	12,900
	2	7,950
	3	5,700
4	7,850	

まとめ

本稿では『バイエル』の付録について注目して考察してきた。3冊の付録があったのだが、それらの概要と一番初めの付録である『メロディーブック』について詳細に検討をした。その結果、以下の点について明らかとなった。

1、付録としての『メロディーブック』は3冊あるがいわゆる第1分冊だけが、当初から『バイエル』とともに「セットもの」として意図されていたこと。

2、『メロディーブック』に含まれる楽曲は、民謡とオペラの編曲で占められ、その割合もほぼ同数であった。オペラについては比較的現在でも知られているオペラの楽曲を中心にしていた。民謡についてはドイツのものだけではなく、ヨーロッパ各地の民謡を取り扱っており、その中には日本の唱歌として知られるものも含まれていた。また、第1曲からある程度は難易度順に並べられていると考えられる。

3、刊行台帳からは、『メロディーブック』が『バイエル』と同様に、非常に良く売れたことがわかる。1冊の完全版だけでなく、4冊の分冊版を加えた5つの販売バリエーションがあったが、なかでもよく売れたのは第1分冊であった。売れ行きの良さは14年ほど遅れて出版された第2、3巻が、いわばこのヒットにあやかって出版が計画されたのではないかとさえ推測させる。

第2、3巻の詳細の検討については稿を改めたいが、刊行台帳に記された発行部数の点から少し先回りして述べると一つ目の『メロディーブック』とは比較にならない程不発であった。1冊目の『メロディーブック』の好調が2冊目3冊目とは続かなかったようである。このことが一体何を意味するのか、詳細な検討については次稿で検討を加えたい。

参考・引用文献

小野 亮祐、多田 純一 (2015) 「『バイエルピアノ教則本』Ecole Preliminaire de Pianoの初版について -複数の初版とその版数および刷りの解明-」、『北海道教育大学紀要. 教育科学編』66(1)、p.195-205

小野亮祐、多田 純一、長尾 智絵、安田寛 (監修) (2016) 『『バイエル』原典探訪：知られざる自筆譜・初版譜の諸相』音楽之友社

櫻井雅人、ヘルマン・ゴチェフスキ、安田寛 (2015) 『仰げば尊し：幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡』東京堂出版

B. Schott's Söhne (1900) *Verzeichniss des Musikalien-Verlags von B. Schott's Söhne in Mainz*. Mainz

多田純一 (2009) 「『バイエルピアノ教則本op.101』における指使いとその変遷」、『創発：大阪健康福祉短期大学紀要』8、p.53-65

多田純一 (2010) 「日本における『バイエルピアノ教則本』の受容と変遷」、『音楽教育史研究』(13)、p.53-68

安田 寛、多田 純一、長尾 智絵 (2009) 「バイエル教則本初版本の研究」、『奈良教育大学紀要 人文・社会科学』58(1)、p.121-126

安田寛 (2012) 『バイエル：日本文化になったピアノ教則本』音楽之友社

論文末一覧表

巻	番号	タイトル	原曲初演	作曲家	Litolff版(Franz Relling)での曲の変更(網掛け)、または追記(網掛けなし)	調
1	1	Air Allemand			Volkslied : Ich hab' den ganzen Vormittag.	C
	2	Air Allemand			Volkslied : So viel Stern' am Himmel stehen.	G
	3	Air Allemand			Volkslied : Fahret hin, fahret hin.	C
	4	Air Allemand			Volkslied : In einem kühlen Grunde. Fr. Glück	F
	5	Othello	1816	Rossini		C
	6	Air Allemand			Volkslied : Steh' ich in finster Mitternacht.	F
	7	Air Allemand		Pohlenz	Volkslied : Auf Matrosen, die Anker gelichtet. A. Pohlenz	C
	8	Lucie di Lammermoor	1835	Donizetti		G
	9	L'Elisire D'Damore	1832	Donizetti		C
	10	Air Allemand		Mozart	Volkslied : Komm, lieber Mai.	G
	11	Gemma di Vergi	1834	Donizetti		C
	12	Air Allemand			Volkslied : So leb' denn wohl.	F
	13	Air Russe			Russisches Volkslied	G, C
	14	Air Italien		Caraffa	Italienisches Volkslied	D, G
	15	Air Bohemien			Böhmisches Volkslied	C
	16	La Famille Suisse	1809	Weigle, Joseph	Die Schweizer Familie	F
	17	Air Allemand		Silcher	Volkslied : Ich weiss nicht, was soll es bedeuten.	C
	18	Air Polonais			Polnisches Volkslied	G
	19	Air Anglais		Henri Carey	Englisches Volkslied	C
	20	Air Flamand			Flandrisches Volkslied : Lebe wohl, mein flandrisch Mädchen.	G
	21	Nabucodonosor	1842	Verdi	Volkslied: Da streiten sich die Laut' herum. _ Air Allemand C. Kreuzer	C
	22	Air Allemand			Volkslied : ça, ça, geschmauset.	F
	23	Air Allemand			Volkslied : Im Wald und der Heide.	C
	24	Air Russe			Russisches Volkslied : Seht ihr drei Rosse	G
	25	Air Espagnol			Spanisches Volkslied	D
	26	Belisario	1836	Donizetti		G
	27	Air Suisse			Schweizer Volkslied : Herz, mein herz, warum so trauig. Fr. Glück	G
	28	Air Allemand			Schwäbischswes Volkslied : Drunter im Unterland. Air Souabe.	C
	29	Air Allemand			Weber's Letzter gedanke. _ Dernière Pensée de Weber. C. G. Reissiger	F
	30	Air Ecosais			Schottisches Volkslied	B
	31	La Neige	1823	Auber	Barcarole aus Oberon _ Barcarolle d'Oberon C.M.v.Weber	F
	32	Air Allemand		Schulz	Volkslied : Bekränzt mit Laub.	C
2	33	Alessandro Stradella	1844	Flotow	Polnaisew aus Puritaner. _ Polonaise des Puritains. V. Berllini	F
	34	Air Polonais			Polnisches Volkslied	G
	35	Air Italien		Paigiello	Italienisches Volkslied	G
	36	Air Francais			Französisches Volkslied	D
	37	Air Allemand			Volkslied	A
	38	Air Polonais			Polnisches Volkslied	a
	39	Air Allemand			Volkslied : Es kann ja nicht immer so bleiben. F. H. Himmel	F
	40	Le Postillon de Lonjumeau	1836	Adam	Der Postillon von Lonjumeau.	F, C, F
	41	Robert Bruce(Donna del lago)	1846	Rossini	Chor aus Freischütz: Wir winden dir. Choeur de Freischütz C. M. v. Weber	G
	42	Air Autrichien			Oesterreichisches Volkslied.	D
	43	Lucie di Lammermoor	1835	Donizetti		G
	44	Le Cheval de Bronze	1835	Auber	Drer Karnaval von Venedig. Le Carnaval de Venise	C
	45	Air Allemand		Keller	Volkslied : Helft, Leutchen, mir vom Wagen doch.	F
	46	La Sonnambula	1831	Bellini	Die Nachtwanderin.	C
	47	Fra Diavolo	1830	Auber	Schwäbisches Volkslied. Wo e kleins Hüttle steht- Air Souabe	G
	48	Le Concert de la Cour	1824	Auber	Walzer aus Preciosa. Valse de Préciosa. C. M. Weber	C
	49	Air Suisse			Schweizer Volkslied : Steh' nur auf , dfu lust'ger Schweizerbu.	G
	50	Air Francais			Französisches Volkslied	C
	51	Air Allemand		Naegeli	Volkslied : Freud euch des Lebens.	F C F
	52	Lucrezia Borgia	1833	Donizetti	Arie aus Lucrezia Borgia. _ Air de Lucrezia Borgia	B
	53	Guillaume Tell	1829	Rossini	Marsch aus Norma. Marche de Norma. V. Berllini	F
	54	Air Anglais			Englisches Volkslied	C
	55	I Lombardi(Jerusalem)	1843	Verdi	Volkslied: Kommt a Vogerö geflogen. _ Air Allemand	D, G
	56	Air Espagnol		Gomis	Spanisches Volkslied	C
	57	La Pazza per Amore	1835	Coppola		F

論文末一覧表 (続き)

	58	La Sonnambula	1831	Bellini	Der Nachtwandelerin	B
	59	Air Irlandais			Irländisches Volkslied : Letzte Rose	F
	60	Belisario	1836	Donizetti		C
	61	Air Italien			Italienisches Volkslied	G
	62	Le Cheval de Bronze	1835	Auber	Die Entführung aus dem Serail_ L' Enlèvement au Sérail. W. A. Mozart	C
	63	Air Tyrolien			Tiroler Lied	C
	64	Norma	1831	Bellini	Duett Aus Norma. _ Duo de Norma. V. Berllini	F
	65	Air Russe			Russisches Volkslied	
	66	Air Venetien			Venetianisches Volkslied	F
	67	Air Tyrolien			Tiroler Lied	C
	68	La Flute Magique	1791	Mozart	Glockenchor aus : Die Zauberflöte_ Choeur de Clochettes de la Flute enchantée. W. A. Mozart	G
	69	Donna del Lago	1819	Rossini	Baierisches Volkslied: Hab oft die ganze Nacht. _ Air Bavaois	C
	70	I Puritani	1834	Bellini	Die Puritaner. Les Puritains	G D
3	71	La Fille du regiment	1839	Donizetti	Tyrolienne aus : Die Regimentstochter. _ Tyrolienne de la Fille du Régiment.	C G
	72	Air Suisse			Schweizer Lied.	G
	73	Saffo	1840	Pacini		C
	74	Air Tyrolien			Tiroler Lied : Du wirst mir's ja nit übel nehma.	F
	75	I Puritani	1834	Bellini	Die Puritaner. Les Puritains	C
	76	Air Autrichien			Oesterreichisches Volkslied	
	77	La Part du Diable	1843	Auber	Lied aus: Die lustigen Weiber. _ Lied de: Les joyeuses Commères de Windsor O. Nicolai	C
	78	Air Ecosais			Schottisches Volkslied	F
	79	Air Allemand			Volkslied	C
	80	Le Brasseur de Preston	1838	Adam	Der Brauer von Preston.	F
	81	La Fille du regiment	1839	Donizetti	Chor aus : Die Regimentstochter. _ Choeur de la Fille du Régiment.	C
	82	La Flute Magique	1791	Mozart	Die Zauberflöte : Ein Vogelfänger bin ich ja	G
	83	Air Irlandais			Irishes Volkslied : Robin Adair.	C
	84	Air Allemand			Volkslied :	F
	85	Ernani	1844	Verdi	Duett Aus Norma. _ Duo de Norma. V. Berllini	C
	86	Air Allemand			Volkslied : Wohlauf, noch getrunken.	G
	87	La Fille du regiment	1839	Donizetti	Die Regimentstochter.	C
	88	Air Suisse			Schweizer Lied.	G
	89	La Favorite	1840	Donizetti	Die Favoritin.	D
	90	La Gazza Ladra	1817	Rossini	Die diebische Elster	G
	91	Zampa	1831	Herold		D
	92	Le Domino Noir	1837	Auber	Cachucha. Spanischer Tanz. _ Danse Espagnole.	G
4	93	Lucie di Lammermoor	1835	Donizetti		D
	94	La muette de Portici	1828	Auber	Czar und Zimmermann A. Lorzing	G
	95	Das Nachtlager in Granada	1834	C. Kreuzer	Romanze aus : Das Nachtlager. Romance de : Une Nuit à Granade	c, C
	96	Das Unterbrochene Opferfest	1796	Winter	Le Sacrifice interrompu	G
	97	Der Freischütz	1821	Weber		C
	98	Les Hugnots	1836	Meyerbeer	Drr postillon von Lonjumeau. _ Le Postillon de A. Adam	F
	99	Don Juan	1791	Mozart		B
	100	Macbeth	1847	Verdi	Die Jüdin. _ La Juive. F. Halevy.	F